

男らしさと攻撃性に関する一考察

河 添 博 幸

序

現代日本のみの問題とは言い難いが、男性主導社会と言われて久しい。このことが現代の社会において負の影響を及ぼしているのではないか、このような論調が一般的になりつつあることは否めないであろう。では、その負の影響とは一体何であるのか、そしてそれはどのような経緯において生じたのか、その起因となるものは何なのか、これらを探求すべく我々は、男性らしさとは何か、女性らしさとは何かという「らしさ」について再考しなければならないと思われる。

われわれが究極的に求めているものは、何なのか。それは男性、女性という二項対立的な枠組みではなく、人間としてどうあるべきかという問いに対する答えである。ただ単に男性主導社会や男女の不平等感にのみ焦点を向けるのではなく、老人や子供を含めた人間としてのあり方、という観点が不可欠であるように思われる。

そこで、その観点を意識しながら、それぞれの「らしさ」とは何か、つまり、大人らしさ、子供らしさ、男らしさ、女らしさとは一体何なのか、それらが俗にいわれるところの社会、文化相対的に形成されたものなのか、あるいはそれ以前に、動物としてあるあり方の根底に存在しているものなのか、この点を明確にしなければならないであろう。この点を明確にすることによって、本来の役割、平等、権利の主張について再考すべきではないだろうか。

さて、その「らしさ」について、特に男性側（男らしさ）の問題を中心に検討したい。なぜなら、先に述べた男性主導社会において中心をなすものは男性であるのに、昨今、被害者の立場である女性側の問題としてのみ取り扱われている感があるドメスティック・バイオレンスやセクシャル・ハラスメント、性犯罪などについて、問題の源泉であると思われる男性側の問題は、解決はおろか、さほど表面化されてすらいらないからである。被害者側の立場としての女性の問題は、加害者側の立場としての男性の問題へとそのまま移行できるはずである。

男性側の視点からの考察によると、男らしさという縛りが問題の一因であると一部の女性学や男性学の研究者によって主張されている。果たしてそうなのだろうか。また、男らしさの概念をめぐって、攻撃性や暴力性が当たり前のように指摘されているが、果たしてそうなのか。このような点について、再考されなければならないであろう。

また、ジェンダー論でいうところの男らしさの否定的側面について考えた場合、われわれはその意味での男らしさというものをそれほど意識しているのだろうか。確かに自殺についていえば、中高年男性の比率が圧倒的に多い。その要因としてもっとも多いのは、不況による経済的要因である。直接的には経済的要因であるが、間接的には、「男として」の地位や収入という「プライド」が関わって

いるとも考えられる。

しかしながら、そのことだけが要因であるとは考えにくい。われわれは実はそれほど男らしさにこだわっていないように思われるからである。意識的にこだわっていないと考えると、それは無意識のうちに刷り込まれてきた可能性が高い。また、社会・文化相対的に刷り込まれただけではなく、生物学的に、あるいは本能的に備わっているとも考えられる。そのどちらにしろ、男らしさについて再考の余地はあるであろう。

1. 男らしさ

1.1. 先行研究における男らしさ

「男らしさ」という、一般的に何となく理解されていると思われる概念は、本質的には個人が抱えているイメージであったり、あるいは地域や社会によって少なからず異なって捉えられていたり、また時代的背景によっても相違があるものと考えられる。では、男らしさの概念についてある一定の定義づけができるのか、それとも普遍的な定義づけは不可能なのか、まずはこの点から論じなければならない。本論稿においては、そもそもその定義づけについて論じるという主旨であるがゆえ、この時点で定義づけはしないが、男らしさというものがどういうものであるか、まずは先行研究に基づいて検討しよう。

本来、男らしさというものは先天的に備わっているものなのか、あるいは、後天的に備わるものなのかという問いについて論じなければならないのかもしれない。しかしながら、この点については、男らしさを定義する上において論点を先取する可能性があるので、あえて論じないことにする。

では、ここでいうところの男らしさとは何を意味するのか。「おとこらし（男らし）」は、①男が男の気性を備えている、②姿や性質が女らしくなくて男にふさわしい（広辞苑、第2版補訂版）、とある。では、ここでいう「男の気性」や「男にふさわしい」とは具体的にどのようなことであろうか。生物学的には性差は歴然としているものの、その「らしさ」という点について、数多くある生物について普遍性を求めるのは不可能であろう。人間ということだけ考えた場合、「らしさ」はあくまでも人間特有の「らしさ」であり、人間における役割と考えることは可能である。つまり、人間がその歴史において社会・文化的に形作ってきた男らしさ、われわれが親や社会から刷り込まれてきた男らしさ、すなわちジェンダー論における男らしさである。

先行研究において、社会・文化的に作られてきた「男らしさ」は具体的にどのようなものなのかという問いに答える試みが各分野、立場によってなされている。まずは、霊長類と人類の歴史を振り返りながら、男らしさについて検討しよう。

人間以外の霊長類において、あるいは人間においても言えるかもしれないが、集団の中で「食」と「性」に関わる欲求は、ある意味で、動物として生きていくための最低限の欲求と言える。「食」に関しては、なくなれば次の食を探すことができ、集団の中では分配が可能である。しかし、「性」に関しては、相手はなくならないが、数の限度や相手の同意という問題が発生する。では、その解決法はあったのか。現代の人間社会においてもその問題が常に浮上することを考えると、未解決のままであると言わざるを得ない。

なぜこのような問いを投げかけるのか。それは、この課題の解決を試行錯誤しつつ、霊長類、もしくは人間は社会性を発達させてきた可能性があるからである。「食」と「性」は一体われわれにどの

ような社会的課題を与えてきたのか、それが男らしさとどのような関連性を持つのか。山極（2003）は、ゴリラやチンパンジーが外敵から「食」や「メス」「子供」たちを守るために、派手な外見や、体の大きさにこだわっていったことを挙げ、このことが有効であったとしている¹。このことは人間にとっての男らしさとどのような関連性をもつのだろうか。

現代の男たちは、外見的な男らしさへのこだわりを持っていて、髪形を女性に比べて短くする、筋肉をつけるために体を鍛えるなどといったことを行っているようにも思えるが、これは原始的な「食」や女性、子供を守るという目的に直結するものではない。しかし、強いて言えば、ゴリラやチンパンジーの習性²が残存している可能性は考えられる。特に外見上の男らしさの顕著な例としては、あくまでもその個人が持つ主観的男らしさとしてであるが、角刈りやパンチパーマ、体力の強さを表せるような体格を持つなどが考えられるであろう。

また、「性」に関しては、男の暴力を消し去れなかったのは、人類がテナガザルのようななわばりを作ってペア生活を送らなかったからであるとした上で、特に初期人類は複数の男や女が共存する集団の内部に独占的な配偶関係を作ろうとしたために、当然そこには嫉妬や闘争が存在することとなり、人類は性交渉を互いに回避する近親同士で集団を作り、性交渉を夫婦だけに限定するという手段を見出した、ということである³。

さらに、その夫婦関係にはゆるぎない信頼があり、その信頼が何ものにも代えがたいとき、男たちはその女と子供を命がけで守ることになる。それが、現代の男性に受け継がれてきた「男らしさ」である。しかしながら、男たちは女を介した同盟関係を完成させることはできなかった。例えば、父親が息子の嫁と性関係をもつ可能性や、兄弟同士が性的なトラブルで殺し合う可能性すら考えられる。その解決方法は、言うまでもなく「暴力」によるところが多いことは否めないであろう。その理由として、山極は、人類がテナガザル的なペア結合に至ることもなく、ポノボ的な乱交社会⁴を実現させることもできなかったからだと結論している⁵。

このように考えていくと、霊長類の視点から検討される男らしさは、女性や子供を守るという男らしさと、「性」が絡んだ「暴力」という男らしさの二点であると思われる。ただし、後者については、議論の余地がある。

次に、コマロフスキー、M.（1984）が、1960年代から1970年代にかけて、アイビーリーグのある大学において、実験的インタビューと心理テストを用いて、4年生の態度と経験を分析した内容を検討したい。

コマロフスキーは、文化には、男らしさについて二つの相反する概念、つまり、“支配的”なものと、“ヒッピー的”なものがあるとし、「支配的な男らしさとは、男性は強くたくましく、身体強健であり、また、知的にも優れ、理性的、論理的に物事を考え、心理的にも強くタフで、ほとんど感情を表に現さないということだ。男らしい男は常に女を支配している。男性の体は女性よりもたくましいが、とりわけ重要なのは、心理的にも女性より勝っていて、女が寄り掛かり、頼りにする相手であり、男女関係の支えであることだ」⁶と、支配的な男らしさを規定している。また、一方で「この理想とは正反対な、サブカルチャーであるヒッピー文化は、ウィメンズ・リブがルーツになっている。男と女に知的優劣はなく、女も男に劣らず、理性的かつ論理的であるとみなされている。大切なのは、男と女の関係は対等なパートナー同士の関係だということである。従順な弱い女が、冷静で意思の強い男を頼りにするというステレオタイプは通用しない」⁷として、このような二つの男らしさを提示し

ている。ただし、後者の男らしさについては、ヒッピー文化が男らしさ自体を否定しているとも考えられ、あくまでもコマロフスキーによる分類であることを付け加えておこう。

この後者の男らしさは、歴史的・時代的な背景に基づいている。つまり、1970年代のアメリカの、男女平等をスローガンに掲げたウィメンズ・リブの文化的影響によるものであることは否めない。この影響は、国境を越え、現代の日本においても根付いた感があると言えよう。しかしながら、一方で、伝統的な男らしさの概念が捨て去られたわけではなことも考慮しなければならない。

問題は、この相反する男らしさの概念の狭間に置かれる男性の心理状態であろう。コマロフスキーは、その狭間にいる男性の「緊張」を問題として捉えている。つまり、男らしさと女らしさのイメージが変わることは、パーソナリティの核心にふれる問題であるとし、女性が男性にとって新しい挑戦者となって（従来の男らしさが）否定されることと、女性との関係において、男性のリーダーシップまたは支配が成し遂げられないことが、もっとも厳しい緊張の原因であると言っている⁹⁾。

これらのことを現代日本の男性に置き換えると、この研究の対象となった年代の学生は、日本でいうところの団塊の世代と一致している。つまり、この世代の男性もしくはこの世代以降の男性は、これら相反する男らしさの概念の狭間で緊張を強いられてきたと考えることは可能であろう。このように考えると、この緊張がもたらす心理的影響や社会的影響は、少なからず社会において何らかの事象として表れているに違いない。この点については後の課題としたい。

次に、人類学の立場から、ギルモア, D. (1997) が地中海領域を中心に行ったインタビューに基づく男らしさについて検討しよう。ギルモアのいう男らしさの意味は、大人の男として、社会で広く認められている在り方のことである。ギルモアは、「男が演ずる基準⁹⁾」には、ほとんど男だけに特有なものとして、繰り返しが多く見られること、そして強調とか形態の違いといった表面的な差異の下には、男性性の概念、その象徴化したもの、その教育的内容について、一定の類似性が見られることを指摘している。しかも、この類似性は多くの社会に存在するが、決してすべての社会に存在するわけではないと主張している¹⁰⁾。つまり、男らしさにはある種の傾向や類似性が認められるが、それが必ずしも普遍的なものではないということである。

例えば、バルカン諸国では、「真の男」というものは、酒豪で、自由に金を使い、勇敢に戦い、大家族を養う男である。また、東モロッコでは、体力があり、大胆不敵に戦い、セックスが強い点で、腰抜け男とは区別される。さらに、シシリー島では、真の男とは「女たちを保護するための、必要な強さ、力、策略の持ち主」と定義されている¹¹⁾。では、南西アフリカの、今まで戦争をしたこともなく、比較的小となしいクン・ブッシュマンではどうであろうか。暴力を否定し、温厚さと協調性を大切にす文化をもつブッシュマンでさえも、少年たちは、技術と忍耐を試すテストを経て、男としての権利を獲得しなければならない。成長した大きな雄鹿を殺して初めて、一人前の男と認められて結婚が許されるのである¹²⁾。このように、男らしさの概念は普遍的ではないとはいえ、ある種の伝統的な統一性が見られるのである。

ギルモアの視野のうちには、先述のヒッピー的なサブカルチュアは存在しない。これはギルモアが調査した地域が地中海周辺に限定されているからであろう。つまり、地中海周辺地域は、アメリカ文化の影響が受けにくいのではないと思われる。

1.2. 日本映画・日本文学における男らしさ

さて、現代の日本においては、男らしさはどのように捉えられ、また時代とともにどのような変遷

をしてきたのだろうか。かといって、どこまでも時代をさかのぼる必要性はないものと思われる。なぜなら、問題となるのはあくまで現代日本であり、とくに戦後、アメリカ文化が流入した後、どのように個人の価値観が変わっていったのか、また、環境としての社会がどのように変わっていったのか、これらを明確にすることにより、男らしさの概念も捉えやすくなると思われるからである。

個人の価値観は、ある意味で社会に影響される。アメリカ文化の流入は、それまで日本人が抱いていた男らしさのイメージを変えたのだろうか。日本人が抱く男らしさは、文学、映画などによって、その時代のヒーロー像として描写される。

戦前から戦後間もない頃まで、歌舞伎などの伝統もあり、映画の主人公になる男性イメージは、概して、ナオナヨとしており、頼もしさに欠ける優男の二枚目が主流であったが、他方で、この二枚目を支える男性のタイプとして配置されていたのが、剛直でたくましい立役であった¹³⁾。しかしながら、戦後アメリカ文化の流入により、優男を理想像としていた日本の大衆文化は、アメリカンヒーロータイプの、タフで強く、ハンサムな男性を理想とする方向へと転換された¹⁴⁾。

例えば、映画の主人公でいうと、「太陽の季節」¹⁵⁾に代表される石原裕次郎や「若大将シリーズ」¹⁶⁾に代表される加山雄三などが考えられる。キャラクター的には、それぞれ違いがあるものの、それまでの日本的なイメージを払拭するタフで強く、ハンサムな男性像である。また一方で、アメリカ文化を感じさせない日本的なヒーロー像も存在する。日本独特ともいえる仁侠映画¹⁷⁾における主人公像である。例えば、高倉健や菅原文太などがその例であろう。彼らのイメージは、「ヤクザ」という、ある種特別なイメージとして描かれている点は否めないが、これらの人物像に男らしさを見出す人々も少なからずいることも事実であろう。彼らには、アメリカ的な一種の明るさは見受けられないものの、タフで強いという側面においてはアメリカンヒーローとの一致が見られる。また、義理と人情に厚いという点においては、日本的な要素も有している。

また、日本映画史上、シリーズ物としては最多の記録を持つ「男はつらいよ」¹⁸⁾の中の寅さんを演じる渥美清を忘れてはならないであろう。外見的にはまったく「あこがれ」を感じさせない容姿である。しかしながら、その人間像は義理と人情に厚く、口は悪いが、やさしさを感じさせる男である。内容的には女性に恋をしてはふられるという変化のないあらすじにもかかわらず、長年続いた作品の主人公の意味するものは、ある意味で、一般的な日本人男性が自己と同一化しやすく、われわれに安心感を与える男性像であり、それは、先述のあこがれの対象としての男らしさとは若干相違が見られるものの、やさしさや包容力という点では、一致が見られるものである。

ところで、1970年代から80年代にかけての「しらけ世代」¹⁹⁾を代表する男性として萩原健一が存在する。彼の代表作である「青春の蹉跌」²⁰⁾は、石川達三が昭和40年代に発表した作品の映画化である。有望な弁護士として期待されている法学部の学生が、将来の夢のために殺人を犯してしまうという物語によって描かれる男性像は、それまで描かれていた男性像とは違い、どこか暗い影を持ち、一見、やさしさや包容力などは感じさせない、常に人間や社会に対してしらけているというイメージを持ち合わせている、いわゆるニヒルな人間像である。また、昨今よく言われているキレル人間、つまり突然、怒りの感情が噴出し、暴力的になる人間像も兼ね備えている。この男らしさと暴力性については後に述べることとする。

また、1980年代に入って、田中康夫のミリオンセラーである『なんとなくクリスタル』が映画化された²¹⁾。この作品の主人公は女性であるが、この中に出てくる男性はユニセックス的であり、さほど

リーダーシップを発揮しない、ただやさしさだけが強調されている。この時代の象徴といえる「やさしい男性」は現代においてもその影響は残存している。逆説的に言うと、女性の地位や人権、自己主張がこのころから徐々に現実性を帯び、女性の社会進出がごく自然に感じられてきた時代といえるであろう。

さらに、文学における男らしさの一面は、1960年代後半から、池波正太郎によって描かれ続けられた『鬼平犯科帳』の主人公、長谷川平蔵に見ることができる²⁹。この男性像は、小説の中の時代的背景に基づくというよりも、池波自身が抱く昭和の男らしさ、つまり、伝統的な男らしさを表しているのではないだろうか。例えば、若かりし頃の長谷川平蔵は、「それゃあ、あのころの長谷川さまときたら、火の玉のように、威勢がよくて、土地の悪どもがちぢみあがっていたものな。博打は強いし、酒の飲みっぷりなんてもな、惚れ惚れしたもんだ。一升かるくあけて、こう脇差を落とし差しにしよう。彦十³⁰ ついて来い！・・・なんてね。」³¹

このように、池波が描く男性像は、酒や賭け事が強く、威勢や気風がいい、いわば、地中海周辺地域の男らしさやアメリカの伝統的な男らしさと類似性が見られる。また同様に、先述の寅さんの人間像とも類似性が感じられるのである。

次に、三島由紀夫が描く小説、特に『仮面の告白』³²の中の男性像としての「私」は、架空の人物というよりはむしろ、三島自身であろう。その題名からして、仮面（ペルソナ）性を強調するように見せかけて、この「仮面」は、実は三島の内面性であると捉えることもできる。外見上の男らしさにこだわり続けた三島は、内面的にも、三島自身が抱く理想的な男らしさを兼ね備えておらず、そのことが三島にとって、さらなる男性性への興味を増幅させているように思われる。

三島の場合は、一般的に論じられる男らしさ（男性、女性という枠組み）ではなく、両性具有的な視点、つまりホモセクシュアルを肯定する立場であろう。なぜなら、男性に対するホモセクシュアル的な描写が文脈の節々に現れるからである。例えば、「私と同じようにいつも風邪ばかりひいている痩せた少年が、体重計の上に立った。産毛がいっぱい生えた彼のみすほらしい白い背中を見ているうちに、私に突然記憶が蘇った。私がいつも近江の裸体を見たいと、あれほどはげしく願っていたことを。体格検査というその格好な機会に、私が愚かにも思い及ばなかったことを。すでにその機会は過ぎ、またあてどもない機会を待つばかりではないことを。」³³ や、「私はこの世にひりつくようなある種の欲望があるのを予感した。汚れた若者の姿を見上げながら、私が彼になりたいという欲求、私が彼でありたいという欲求が私をしめつけた。その欲求には二つの重点があったことが、あきらかに思い出される。一つの重点は彼の紺の股引であり、一つの重点は彼の職業であった。紺の股引は彼の下半身を明瞭に輪郭づけていた。それはしなやかに動き、私に向かって歩いてくるように思われた。いowan方ない傾倒が、その股引に対して私に起こった。何故だか私にはわからなかった。」³⁴ というような下りである。このように、彼の男性へ向ける視点は、単に男らしさへのあこがれや理想というより、男性性に対して、一種の性的な感覚を感じさせるものである。そう考えると、三島の男らしさに対する意識は、かなり強いものであると言える。

さて、このように日本人の作家や脚本家、映画監督がイメージする日本人男性像は、そのほとんどが力強さだけではなく、裏に秘めたやさしさや包容力、人情の厚さなどが感じられ、このことに、欧米文化と日本文化の相違が垣間見られる。つまり、日本人独特の「はにかみ」が存在するものと思われるからである。

1.3. インタビュー（面接）による男らしさ

さて、先に述べたように、男らしさについては、文化や社会、時代によって、また個人によっても類似性は見られるものの、決して普遍的なものではなく、あくまでも相対的に捉えるべき概念であると思われる。そこで、一般的に男らしさはどのように捉えられているのか、また、現代日本の女性たちは男らしさをどのように捉えているのか、集団インタビューによる面接及び個人インタビューによる面接において検証する。ただし、個人インタビューにおいては、男らしさというのは、いわば抽象的な概念であるため、その説明が困難であることが予想されるので、具体性を持たせ、インタビューをより円滑に進めるためという理由と、男らしさと暴力、攻撃性の関連を調べるためという理由に基づいて、主にドメスティック・バイオレンスについてインタビューを行い、男らしさとの関連性を導き出すこととした。

1.3.1. 集団面接によるインタビュー

テーマ：男らしさについて。

目的：共通のテーマについて男女差、年齢差による意見の相違の検討。

対象者：ある心理学教室²⁸⁾に通う男女7名（男性2名、女性5名）を抽出。それぞれの年代は、男性は40代が2名、女性は10代が1名、30代が3名、50代が1名である。

日時：2005年6月12日、午後2時から4時。

方法：討論形式であくまで自由に語らせ、筆記とカセットテープによって記録した。

1.3.2. 男性による意見

2名の男性はともに40代である。1950年代と60年代生まれという、日本の高度経済成長期に育った年代である。個人情報保護のために、氏名はA氏、B氏として記述する。

集団討論によるインタビューは、個人インタビューと違って他者が存在し、そのやりとりや話の流れによって、他者の意見に同調してしまうという欠点を持ち合わせている。その点を考慮しつつ、あくまで本人自身が最初にイメージした男らしさの部分を取りだした。

まずA氏は、「日本のやくざ映画の主人公が最初に頭に浮かびますね。外見もかっこいいけど、親分や子分のために命をかける生き方がかっこいいですよ。それと、女や子供みたいな弱いものをかばうところなんかも男らしいと思いますね」と、男らしさのイメージを仁侠映画の主人公にたとえ、喧嘩が強いだけでなく、他者のために自己を犠牲にするような内面性についても男らしさを感じている。このような内面性（自己犠牲）については、地中海周辺地域や欧米では、さほど強調されていない点であり、B氏もこのように答えている。「特に結婚してから、子供やかみさんの生活を支えるために、いやな仕事も我慢してやっている。本当は、給料のことを考えなくていいのなら、もっと楽な仕事をしたい」と、さらに、「仕事上でも、上司や取引先に対しては、言いたいことも言えないし、我慢することも男らしさの一つじゃないかなあ」、という意見である。

単なる経済力のみではなく、その経済力を得るための、自己犠牲的な精神についても男らしいと規定している。このような点は、お家のため、お国のため、あるいは会社のために、自己を犠牲にすることが美德とされてきた日本の文化的特徴といえるかもしれない。

さらに二人は、異口同音に、「改めて男らしさと言われても、これだという確信はない」ということを語っている。これは、日常的に男らしさを意識する場面がなく、というよりも、男らしさ自体をさほど意識していないと考えるほうが正解に近いであろう。

1.3.3. 女性による意見

まずは氏名の記述方法であるが、個人情報保護のため、10代と50代の女性の意見は、10代女性、50代女性と記述し、30代女性については、30代女性 a、b、c と記述することにする。

さて、女性たちは男らしさに対して、どのようなイメージや考えを持っているのだろうか。「精神的な大きさを感じさせるような包容力を持っていて、やっぱり、やさしい人。だけど、いざと言うときは頼りになる人、例えば、車が故障した時などに助けてくれる人が男らしい」(30代女性 a)、「スポーツがうまくて、喧嘩が強い人」(10代女性)、「弱い立場の人(女性や子供やお年寄り)に対して、やさしい人。そして、正義感が強い人。だけど、なかなかいないけどね」(30代女性 b)、「見た感じが力の強そうな人で、自分の意見をはっきり言える人。そして、性格がサバサバしている人。でも最近はそのような男が少ないように思う」(30代女性 c)、「頼りがいがある、自己主張がはっきりできる人。いつも女性を引っ張ってってくれる人。だけど、やっぱり女性に対して、やさしいというのが男らしさにつながると思う。でも難しいのは、やさしいだけの男が増えたような気がする。やさしいだけじゃだめなのよね。どちらかというと、最近では女性のほうが男っぽくなって、男が女性に押されている気がする」(50代女性)。など、このように、自由に語らせた結果、女性たちがそれぞれ抱えている男らしさは、各々が持ち続けている理想の男性像のようである。

10代女性の場合は、男らしさに対する認識が薄いせいか、ごく身近な男性をイメージしており、スポーツや喧嘩という具体的な例は、経験の浅さを感じさせる。女性も30代や50代になると、世界観に広がりが見られ、それぞれが微妙に意見の食い違いを見せるが、「やさしさ」「頼りがい」という点では一致した意見である。このことは、最近女性が強くなったと認識しつつも、男性に対する依存意識を表しており、男らしさに対する期待感が読み取れる。

また、男性が自己犠牲的な部分を男のやさしさであり、男らしさの象徴と捉えているにもかかわらず、女性はさほど男らしいとは捉えておらず、あくまで、女性の言うやさしさは、「頼りがい」や「包容力」との関連性が高い。これらは「懐の深さ」を意味するものであり、女性心理の「甘え」と「依存」を感じさせる。

1.3.4. 個人面接によるインタビュー

テーマ：ドメスティック・バイオレンス(DV)について²⁹⁾。

対象者：面接者と信頼関係ができていると思われる男性22名(30代～50代)を作為的に抽出。

目的：男らしさと暴力の関係について、具体的に男性心理を検討するため。

条件：個室において対話式で行う。1回の面接時間は、約1時間。

日時：2004年6月～8月の2ヶ月間。随時。

方法：筆記およびカセットテープによる録音。あくまで自由に語らせる方法。

DVの背景には、男性と女性がどのような社会的・心理的な枠組みのなかで育てられるか、家庭がどのような男女の力関係を制度化しているかというジェンダー(社会的文化的性差)の問題がある³⁰⁾のだが、この枠組みの中で、男性が備え持っている(と思われる)男らしさに、攻撃性や暴力性が直ちに結びつくのか、個人インタビューによって現実が把握されるであろう。

今回行われた面接調査において、DVの経験がある男性は22名中6名である。ただし、この数字は、あくまでも本人がDVであると認識している場合の数字である。つまり、DVの定義を提示したにも

かわらず、DVは経験がないと認識しているケースが見受けられる。ただし、この面接調査は量的調査を目的とするものではなく、あくまで男性自身の心理的・社会的事実の確認と深層心理を検討するという目的であるため、数字は特に問題とはしない。そして、表記する氏名は個人情報保護のため、頭文字をアルファベットで示すことにする。

さて、彼らの発言内容を検討してみよう。「大声でどなったり、無視をすることはある」(A氏)、「口には出せないが、誰のおかげで食べられてるんだという意識はあるし、かみさんの実家との付き合いを制限したりはする。なぜかという、嫁にきてるんだから、実家に帰られると、腹立たしい」(N氏)。この発言をした二人は、DVを行ったことがないという認識であった。しかし、DVの定義にあるように、これらの言動や行動は、まさしくDVなのである。問題は、このようにDVに関して、さほど意識されていないということであろう。これは夫(あるいは男)であるから、その「男らしさ」を無意識に誇示していると言えるかもしれない。つまり、DVに関して男性側の意識が希薄であるという事実は明白である。

では、DVの経験があると認識している男性はどのような態度を示しているのか、またどのような心理状況なのだろうか。「今はコントロールできるようになったが、若い頃は自分の思い通りにならないとき、物を蹴飛ばしたりしていた。また、そんなときは前からのいろいろなうっ積したものが爆発していた。今でも心理的・性的に無視をしているということではDVかもしれない」(I氏)、「小さなことで夫婦喧嘩して、殴ったりしたことがある。娘からもパパはよく殴っていたと言われた。口で言うよりは手が先に出ていた」(O氏)、「夫婦喧嘩して殴ったことがある」(U氏)、「自分自身短気で、瞬間的に手が出る。言葉においても、あやまられるまでとことん責める。つい最近まで、女のくせにという言葉を使っていた。誰のおかげでという気持ちは今でもある」(M氏)など、そのほとんどが身体的、あるいは心理的暴力である。

このように、事実上無意識のDVが行われているにもかかわらず、男性自身は罪悪感を持ってはいない。これには、男であるから当たり前であるという、いわば男性自身のエゴイスティックな側面が見受けられると同時に、男性自身がいつのまにか刷り込まれている男らしさに、暴力性や攻撃性というものが潜んでいるとも考えられる。また、男性は身近な女性に対して、甘え、そして依存しているという側面も考えられる³⁰。「こいつには何を言っても、何をしても許されると思っている」(O氏)などはその典型的な例であろう。しかしながら、甘えと依存という概念で捉えた場合、別の側面、つまり女性側からの視点も不可欠であろう。すなわち「共依存」³¹という考え方である。「私がいなければこの人は駄目だわ」という女性の心理状態も加担しているように思われる。つまり、守られること、保護されることを期待し、他方においては、自立することを避けたがる女性の意識(心理的依存状態)が存在する³²。

このように、女性の社会参加、自己実現が叫ばれる一方で、そのような風潮に対して、違和感を抱いている女性も少なからず存在することを忘れてはならないだろう。つまり、女性たちも意識上のどこかで、精神的に男性に頼っていて、その心理が男性の暴力や攻撃性を受容せざるを得ない状況を生み出していると言える。確かに男性は、先述したように、男女平等を唱える現代社会で、「男らしさ」を誇示することよりも、女性に対して気遣いを見せている面が多々見受けられる。例えば、女性に対する言葉づかいにおいては、男性同士で交わされる言葉づかいよりも、より丁寧ではないだろうか。また、セクシャル・ハラスメントにならないように、言葉自体や文脈においても、また、しぐさや行

動においても、常に不快感を与えないように意識しているのではないだろうか。

このような、心理的・社会的背景は、男性自身に（コマロフスキーが言うような）緊張を生み出し、それがフラストレーションやストレスとなり、ときに身近な女性への暴力や攻撃性となって表れる可能性が示唆される。しかしながら、この暴力や攻撃性は、果たして男性特有のものなのだろうか。男らしさの象徴³¹⁾なのだろうか。だとしたら、女性による幼児・児童虐待、いじめ、育児放棄、ペット虐待などについてはどのような説明がなされるのだろうか。この暴力と攻撃性については、次の章で検討したい。

さて、戦後から高度経済成長期を経て、現在に至るまでの日本社会は経済的な豊かさを得るとともに、女性の社会進出という現象を生み出した。このように、当然のことながら、女性の発言力の拡大、社会的地位の向上という、戦後間もない頃までの男性主導社会から一転して、女性主導とまではいかないにしろ、ある意味で、女性の立場や地位、人権に配慮が見られる社会になりつつあることは否めないであろう。さらに、団塊の世代と言われる層以降の世代においては、欧米の文化の影響が強いこともあり、生き方に関する価値観も大きく変わってきたものと思われる。

では、このような社会の流れの中で、日本人男性の男らしさ、男性像は一体どのように変遷したのだろうか。先に述べた、文化や社会、時代に左右されない伝統的な男らしさが根強く残ってはいるものの、男らしさについての確認は、実は極めて困難な作業であり、男らしさというものが、ある意味で相対化されつつあるのではないだろうか。「あらゆる場所と時間に通用する、男らしさの普遍的モデルなど存在せず、男らしさは時代によって異なるだけでなく、社会階級や人種、それに男性の年齢によっても違う」³⁵⁾のである。

このように、社会や時代的背景、価値観の変遷とともに、日本社会においても男らしさは相対性を帯びており、しいて言えば、われわれが無意識に刷り込まれてきた男らしさと、現実問題として社会的に求められる男らしさや女性が求めている男らしさ、各々の微妙な温度差が、現代の日本人男性にとって如何なる心理的影響を与えているのか、また如何なる社会的表象となって現れているのかについての検討は今後の課題としたい。

2. 暴力と攻撃性

先述したように、一見、暴力や攻撃性は男性だけが持つ特徴のようにも思える。特に、一部のフェミニストや女性学、男性学という立場の研究者は、男らしさの枠組みの下位カテゴリーとして位置付けている。男らしさへのこだわりや縛りが男性自身を心理的に追い込み、それが暴力や攻撃性となって現れているという主張³⁶⁾が、ごく普通にされている（その主張を全面的に否定するわけではないが、果たして、暴力や攻撃性が男性のみの特徴なのだろうかという問いは避けることができない）。この決め付けが、そもそも男らしさに対するステレオタイプであり、男らしさをネガティブに捉える傾向の元凶のようにも思われる。インタビューの結果、男らしさはさほど意識されておらず、無意識に刷り込まれているという可能性が導かれた。男らしさが、ある意味で、相対性を帯びているということは、その下位カテゴリーである暴力や攻撃性も相対性を帯びるという結論を導き得る。つまり、暴力や攻撃性は男性特有のものではないのではないかということである。ではその点について検討しよう。

まずは、暴力と攻撃性の概念である。この両者の関係は、端的に言うと、攻撃性という心理状態が

存在することを前提とし、その状態から発生する行動が暴力であると言える。つまり、攻撃性が備わっていなければ、暴力はありえないのである。また、暴力といった場合、そのほとんどが否定的イメージにつながると言える。ここで主に対象とする暴力に関しては、正義を盾にした暴力、例えば、テロを抑圧するための戦争や、国を守るための戦争などのような暴力については、あえて論じないことにする。なぜなら、あくまで論点は男らしさとの関連性であり、そのためには日本における身近な暴力、例えば、家庭内暴力、幼児・児童虐待、性犯罪、いじめ、育児放棄などの暴力を対象としながら、男性心理・女性心理、あるいは社会的影響などが検討されることで十分であると思われるからである。

このような身近な暴力を、「男性の持つ」攻撃性という視点からではなく、「人間（あるいは動物と言ってもいい）の持つ」攻撃性という視点から検討したい。「男性は暴力的である」「男性は攻撃的である」という、いわば、われわれが刷り込まれてきた伝統的な男らしさと結びついたイメージは、否定的に捉えたと、その縛りやしがらみに対する緊張やストレスが、男らしさの象徴であるさまざまな暴力となって表れるという、ある意味で、一面的な見方になってしまう危険性が生じる。

逆に考えると、「女性是非暴力的である」「女性是非攻撃的である」ということなのだろうか。これも、われわれが刷り込まれてきた女性に対する「女らしさ」のイメージからくるものであるように思われる。現実の、暴力の絡む事象を踏まえると、例えば、性犯罪に関して言えば、確かに男性の加害者がほとんどである（しかし、その原因が男らしさの誇示とは考えにくい）が、これを男性心理の解明のみで解決しようという試みが（一部の研究者に）見られるが、性に関しては、生物学的視点（男性ホルモンや生殖本能との関連性）や、社会の環境的要因などを考慮しなければならないであろう。つまり、性犯罪の加害者のほとんどが男性であるからといって、男性が暴力的で攻撃的であるとは言えないのである。また、幼児・児童虐待や育児放棄、いじめを考えてみよう。これら暴力絡みの事象は、男性が備えている暴力性や攻撃性に由来すると言えるだろうか。これらの事象においては、男性のみならず女性の関与も否定できない。つまり、女性においても暴力や攻撃性は認められると言わざるを得ない。そのように考えると、暴力や攻撃性が必ずしも男性の象徴や特徴ではなく、人間（あるいは動物）に備わっている特性であると考えられる。

では何故、暴力や攻撃性が男らしさというカテゴリーに含まれるようになったのだろうか。人間の男性はさまざまな霊長類のオス性を受け継いでいるという山際の説によると、オスは発情に伴って上昇する男性ホルモンのテストステロンが攻撃性を高め、競い合う傾向があり、また、ふだん力のない若いオスや（権力的に）順位の低いオスは、その攻撃性をメスに向けることがある³⁷⁾らしいが、これを人間にたとえると、男性ホルモンが強い男性、もしくは、性的欲求が強いが、その欲求を満たすことができない男性が、女性に対して攻撃的な行動をとるという図式が成立する。この点については、あくまでも、性的欲求不満に限られそうだが、欲求不満というのは、一般的には、欲しいものが手に入らなかったり、したいことができないときの、いらいらした状態を指すであろう。

例えば、欲しいチケットを手に入れるために、一晩中並んで待ったにもかかわらず手に入れることができなかった場合や、車の運転中、急いでいるのに渋滞に巻き込まれ、思うように運転できないような場合が考えられる。こうした状況下では、怒りや不満がつのる可能性は高い。この欲求不満と攻撃性の関連については、多くの研究者が主張している³⁸⁾ ことでもあり、攻撃性の説明においては、一つの起因になり得るであろう。

だが、この主張にも疑問は残る。まず第一の疑問は、この主張における欲求不満が攻撃性を引き起こすという場合の攻撃反応は、当然のことながら、その欲求不満解決が目的であると思われる。しかしながら、その攻撃反応が、どのような反応にせよ、欲求不満を解決するものではないのではないかという疑問である。第二の疑問は、人によって、あるいは時と場合によって、欲求不満の度合いに相違があるのではないかとということと、その度合いにより、攻撃性の度合いに変化があるのではないかとという疑問である。第三の疑問は、欲求不満にならない場合でも、攻撃性が起こる可能性があるのではないかとという疑問である。これらの疑問を考えると、欲求不満が直ちに暴力や攻撃性に結びつくとは考えにくいのではないだろうか。では、他に暴力や攻撃性を説明できる材料はないのだろうか。

フロイト・S. (1905) は、攻撃性を「死の本能」(タナトス) という根源的な衝動から派生するものと考え³⁹⁾、男性の攻撃性という概念によってではなく、人間が本能的に備えているものとして規定している。また、アドラー・A. は、攻撃性を「男性的な抗議」と呼び、支配しようとする意思は他者に支配される恐れから生じ、男性は、力を代表し、権力を持ち、戦闘性、攻撃性を持っている⁴⁰⁾と解釈している。これは、アドラーが攻撃性について、本能的なものではなく、文化的・社会的に形成された男らしさの枠組みであることと理解した結果であると思われる。また、ストー・A. (1973) は、フロイトの影響を受け、サディズム・マゾヒズムの視点から攻撃性を検討している⁴¹⁾。さらにウィニコット・D.W. (1958) は、「もし社会が危険な状態にあるとすれば、それは人間が攻撃的であること aggressiveness のためではなく、個人的に攻撃的であることの個々人における抑圧のため」と述べ、人間が自らの攻撃性に気づかず、適切な昇華や統制ができないこと自体が問題であるとしている⁴²⁾。このように、精神分析的視点からの攻撃性に対する検討においても、さまざまな見解が得られる。

最後に、先ほどインタビューに関連して論じた「甘え」と「依存」について言及したい。近年の社会的傾向として、家庭内暴力や校内暴力、幼児・児童虐待などの暴力が注目されている。これは、法律や規範が適用される「ソトの」「公的な」生活空間での暴力よりも、むしろ庇護的な「ウチウチの」「私的な」生活空間での暴力が増加したことを示している⁴³⁾。このことは、親や夫や妻に対する、また、社会に対する「甘え」と「依存」という枠組みで捉えられる。例えば、われわれが育ってきた過程を考えると、当然、無力である乳幼児期は、親に依存していかなければ生きてはいけない。問題はその依存状態、特に心理的依存状態がいつまで続くかであろう。

福島 (1988) は、成人を含めた一般の刑法犯罪においても、爆発型・発揚型というよりは、単に意思欠如性と依存性が目立つだけの、普段はおとなしい、血の気の少ない人間の犯罪が増え、屈折した攻撃性の発動 (受動-攻撃的、依存-攻撃的)、つまり、依存や甘えの葛藤を動機とした暴力犯罪が増加していると指摘する⁴⁴⁾。すなわち、このことは甘えや依存が、乳幼児期以降においても持続性を帯びており、心理的自立ができないでいる成人の増加とその人間のあり方が問題であるとともに、その要因を作った社会的環境も問題視されるべきであろう。

結

このように、「男らしさ」については、一般的にはさほど意識されていないという可能性が露呈された。男らしさは、実は文化的・社会的に刷り込まれてきた可能性が高いということも言えそうである。その文化や社会であるが、当然のことながら、時代的背景、地域差などにより微妙な相違があることは否めない。だが、男らしさに対するイメージには、文化や社会が違っていても、類似性が多い

ことも事実である。その類似性が、いわゆる伝統的な男らしさとして現在もなお存在している。ただし、この男らしさの縛りが直ちに暴力や攻撃性につながるとか、男性自身をストレスや緊張にさらす起因になるとは考えにくい。また、男性が持つとされる攻撃性を、あらゆる暴力に適用することは危険であろう。なぜなら、攻撃性は人間誰もが備えている可能性があり、暴力は、男性のみならず女性においてもあり得るからである。つまり、男らしさは相対性を帯びており、その下位カテゴリーであると思われる暴力や攻撃性も、男性の特徴であるとは言いがたいのである。

さて、一般的には「男性主導社会」と言われている。確かに現代においても「女性主導社会」とは言い難い。しかし、ウィメンズ・リブの登場以来、徐々にではあるが、女性の人権や主張が正当化されていることも事実である。つまり、ある意味では、表面上の男性主導、本質的な女性主導と捉えることも可能である。このような社会の変化は、男性自身にどのような心理的变化をもたらしているのだろうか。時代や社会の変化があるものの、男性はいつの時代も、その時代のヒーロー像を理想とし、自己と同一化しようとする。しかし、現実の自己とのギャップを悟り、理想的な男性になりえない事実と直面する。男性はそのギャップを認知し、適切な自己像を見出せない状態に在るのではないだろうか。女性の社会進出により、自己の存在感や居場所の不明瞭さも増して、最終的に心理的不安定状態に陥っている可能性が示唆される。

単に男らしさの縛りが起因して男性が暴力や犯罪を起こすという枠組みは、ある意味で、一面的な捉え方であり、暴力や犯罪というのは、男らしさ、女らしさというときのらしさの問題というよりは、むしろ人間としてどうあるべきかという問題である。われわれは、人間として、人間らしさとは何であるのか、本来人間はどうあるべきかという問いに答えることを希求すべきではないのか。

注

- 1) 山極寿一、『男の進化論～男らしさの起源を求めて』、筑摩書房、2003、pp. 32-34。
- 2) 山極は、ゴリラやチンパンジーが行うディスプレイ（木を揺すったり、胸を叩くなど）のような行為は、特定の相手ではなく、不特定多数の他者に向けられ、オスに対しては手ごわい相手だと思わせ、メスには信頼できるパートナーとしての技量を示すというような見栄を張る習性であると規定している（山極、2003、pp. 70-75）。
- 3) 山極、2003、pp. 206-207。
- 4) ボノボのメスは約35日間の月経周期を持つが、排卵前の2週間から20日間も性皮がピンク色に腫脹するという発情兆候を示す。メスはこの鮮やかな色をした性皮を相手に見せて性交渉に誘う。相手がオスなら交尾に、メスならホカホカと呼ばれる性器こすり交渉になる。このホカホカや交尾は、社会的緊張が高まったときに発現する傾向がある。集団内でけんかが起こったとき、集団同士が会ったとき、離れていた仲間と再会したとき、ボノボのメスは頻繁にこうした性的交渉を結ぶ。これは、ボノボがほぼ完全な乱交で、極めてあっさりした交尾を行い、交尾のパートナーをめぐって激しく争うこともないからである（山極、2003、pp. 93-94）。
- 5) 山極、2003、p. 214。
- 6) コマロフスキー、M.、『男らしさのジレンマ』、池上千鶴子・福井浅子訳、家庭教育社1984、p. 17。
- 7) コマロフスキー、1984、pp. 17-18。
- 8) コマロフスキー、1984、pp. 288-289。
- 9) 大人の男として、社会で広く認められている基準で、一般的に男らしいと思われる行為のことで

ある。

- 10) ギルモア, D., 「男らしさの人類学」, 前田俊子訳, 春秋社, 1997, p. 5。
- 11) ギルモア, 1997, pp. 57-58。
- 12) ギルモア, 1997, pp. 17-18。
- 13) 伊藤公雄, 「男らしさという神話」, 日本放送出版協会, 2003b, pp. 28-29。
- 14) 伊藤, 2003b, pp. 29-30。
- 15) 石原慎太郎の作品が, 「文学界」1955年, 7月号誌上で, 第1回『文学界』新人賞受賞作品として掲載されたものであり, 翌年の1956年, 第34回芥川賞受賞, 後に映画化された。
- 16) 1950年代, アメリカを象徴するヒーローとして, エルビス・プレスリーが登場した。彼が主演した一連の映画作品を真似て, 日本においても「若大将シリーズ」として, 加山雄三が主演した。映画の中では, 頭脳明晰, スポーツマン, 女性にもてて, ハンサムであるという役を演じている。
- 17) 「任侠」とは, 弱きをたすけ強きをくじく気性に富むこと, また, その人, おとこだて (広辞苑, 第2版補訂版), である。このイメージに基づいて日本のヤクザ世界が映画化された。
- 18) 第1作日は, 1969年8月に封切られた。11月には早くも2作日が公開された。
- 19) 1970年代, 「不確実性の時代」と言われ, 世の中や社会の事象に対して, まるで関心がないかのように, しらけていた世代。
- 20) 石川達三が, 1968年に発表した作品。70年代に神代辰巳監督により映画化された。
- 21) 1980年に, 「文藝」に掲載され, 文藝賞を受賞した作品。
- 22) 1968年より, 「オール讀物」に掲載され, 池波はこの作品により, 1977年, 第11回吉川英治文学賞を受賞。
- 23) 平蔵が放蕩無頼の青春時代を送っていたころの取り巻きの一人。
- 24) 池波正太郎, 「鬼平犯科帳の世界」, 文藝春秋, 1990, p. 30。
- 25) 1949年に, 三島由紀夫が最初に書き下ろした長編である。
- 26) 三島由紀夫, 「仮面の告白」, 新潮社, 1950, p. 69。
- 27) 三島, 1950, pp. 11-12。
- 28) 4月から毎週日曜日に開催されているサークル。常時, 7-8名の人数で行われている。
- 29) ドメスティック・バイオレンスは, 夫・恋人など親密な関係にある男性から女性へのさまざまな形態の暴力であり, それを利用して男性が女性を支配することである。暴力には男性が女性を身体的にも心理的にも支配し, 自分の思うようにしようとする行為すべてが含まれるのだが, 具体的には五つに分けられる。①身体的暴力 (殴る, 蹴る, 引きずりまわす, 突き飛ばす, 首を絞めるなど), ②心理的暴力 (無視する, 大切にしているものを壊す, 大声でどなる, おどす, ののしるなど), ③社会的暴力 (交友関係や電話, 手紙などを細かく監視する, 実家との付き合いを制限する, 外出させないなど), ④経済的暴力 (生活費を渡さない, “誰のおかげで, 食べられてるんだ” と言う, お金を取り上げたり, 貯金を勝手におろすなど), ⑤性的暴力 (無理やりボロノを見せる, 避妊に協力しない, 性的な行為を強要する, 暴力的なセックスをするなど) である (日本DV防止・情報センター編, 2002)。
- 30) 日本DV防止・情報センター編, 「ドメスティック・バイオレンス 第2版」, 解放出版社, 2002, p. 12。
- 31) 福島 (1988) は, 甘えや依存と攻撃性が三位一体であると主張している (『甘えと反抗の心理』, 講談社, 1988, pp. 174-206)。
- 32) 斎藤 (1999) は, 「愛しすぎる人」と「愛されている必要のある人」との関係こそ共依存症に他なら

- ず、各種の依存行動はこうした関係の中に繁茂すると説いている（『家族依存症』、新潮社、1999）。ただし、「女性学」の研究者や、一部のフェミニストはこの説を否定している。
- 33) コレット・ダウリングが「シンデレラ」に例え、女は今日もなお、外からくる何かが自分の人生を変えてくれるのを待ち続けており、その他者に面倒を見てもらいたいという根強い願望、個人的・心理的な依存のことをいう（『シンデレラ・コンプレックス』、三笠書房、1990）。
- 34) 「女性学」「男性学」の立場をとる伊藤らは、暴力や攻撃性を男らしさの象徴として捉えている。
- 35) バタンテール、E.、『男とは何か』、上村くに子・饗庭千代子訳、筑摩書房、1998、pp. 35-37。
- 36) 伊藤公雄・樹村みのり他、『女性学・男性学～ジェンダー論入門』、有斐閣、2003 a、pp. 85-88）。
- 37) 山極、2003、pp. 142-144。
- 38) 例えば、岡田（2001）、ザジック、C.（2002）、馬場（1985）、福島（1988）など。
- 39) Freud, S., Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, 1965（邦訳：性欲論三編、『フロイト著作集5』、人文書院、1969、pp. 7-94）。
- 40) アドラー、A.、『人間知の心理学』、1999、pp. 217-263。
- 41) Storr, A., Human Agression, Penguin Press, 1968（邦訳：『人間の攻撃心』、晶文社、1973）。
- 42) Winnicott, D.W., Aggression in Relation to Emotional Development, collected Papers, Tavistock Publications, 1958（邦訳：情緒発達との関連でみた攻撃性、『児童分析から精神分析へ』、岩崎学術出版社、1990）。
- 43) 既に20年近く前に福島章、『甘えと反抗の心理』、講談社、1988、pp. 174-176が指摘している。
- 44) 福島、1988、pp. 176-178。

参考文献

- 青野篤子他著、『ジェンダーの心理学』、ミネルヴァ書房、1999年。
- アドラー、A.、『人間知の心理学』、春秋社、1987年。
- 石川達三、『青春の蹉跎』、新潮社、1967年。
- 石原慎太郎、『太陽の季節』、『現代日本の文学 48』、学習研究社、1970年。
- 池波正太郎、『鬼平犯科帳の世界』、文芸春秋、1990年。
- 伊藤公雄、『男性学入門』、作品社、1996年。
- 『男らしさのゆくえ』、新曜社、2000年。
- 『できない男からできる男へ』、小学館、2002年。
- 『女性学・男性学～ジェンダー論入門』、有斐閣、2003年 a。
- 『男らしさという神話』、日本放送出版協会、2003年 b。
- 「夫（恋人）からの暴力」調査研究会、『ドメスティック・バイオレンス 新版』、有斐閣、2002年。
- ウィルフリート・ヴィーク著、『男という病～男らしさのメカニズムと女のやさしさ』、梶谷雄二訳、三元社、1998年。
- 上野千鶴子、『家父長制と資本制』、岩波書店、1990年。
- 大淵憲一、『人を傷つける心～攻撃性の社会心理学』、サイエンス社、1993年。
- 岡田督、『攻撃性の心理』、ナカニシヤ出版、2001年。
- 鹿嶋敬、『男と女 変わる力学』、岩波書店、1991年。
- ギルモア、D.、『男らしさの人類学』、前田俊子訳、春秋社、1997年。
- キューネ、T.、他編、『男の歴史～市民社会と男らしさの神話』、星乃治彦訳、柏書房、1997年。
- 小浜逸郎、『男はどこにいるのか』、草思社、1991年。

- 『男という不安』、PHP 研究所、2001年。
- コース、E.、『マンズ・ワールド～フェミニズムと男らしさのあいだで』、近藤和子訳、日本経済評論社、1998年。
- コマロフスキー、M.、『男らしさのジレンマ』、池上千鶴子・福井浅子訳、家庭教育社、1984年。
- 小谷野敦、『男であることの困難』、新曜社、2000年。
- 斎藤学、『家族依存症』、新潮社、1999年。
- 酒井隆史、『暴力の哲学』、河出書房新社、2004年。
- 勢古浩爾、『こういう男になりたい』、筑摩書房、2000年。
- 斎藤学、『家族依存症』、新潮社、1999年。
- ザジック、C.、『すぐカッとなる人々～日常の中の攻撃性』、眞田孝昭・加藤長訳、大月書店、2002年。
- ジョージ・L・モッセ、『男のイメージ～男性性の創造と近代社会』、2005年。
- ストー、A.、『性の逸脱』、山口泰司訳、理想社、1985年。
- ダウリング、C.、『シンデレラ・コンプレックス』、三笠書房、1990年。
- 高橋順一他、『人間科学研究法ハンドブック』、ナカニシヤ出版、1998年。
- 田中康夫、『なんとなく、クリスタル』、河出書房新社、1981年。
- 土居健郎、『甘えの構造』、弘文堂、1971年。
- ナウム・アタラー編、『女たちは、いま』、麻生九美他訳、品文社、1994年。
- 日本DV防止・情報センター編、『ドメスティック・バイオレンス 第2版』、解放出版社、2002年。
- 西川祐子他編、『共同研究 男性論』、人文書院、2000年。
- 中村正、『ドメスティック・バイオレンスと家族の病理』、作品社、2001年。
- バタンテール、E.、『男とは何か』、上村くにこ・饗庭千代子訳、筑摩書房、1998年。
- バド・ウィメンズ・オフィス、『女性情報ライブラリー vol.4 ドメスティック・バイオレンス データブック2003』、バド・ウィメンズ・オフィス、2003年。
- 馬場謙一他編、『攻撃性の深層』、有斐閣、1985年。
- 林道義、『父性の復権』、中央公論社、1998年。
- 彦坂諒、『男性神話』、径書房、1991年。
- 福島章、『甘えと反抗の心理』、講談社、1988年。
- 福富護、『らしさの心理学』、講談社、1984年。
- フロイト、S.、『性欲論三編』『フロイト著作集 第5巻』、懸田克躬・高橋義孝他訳、人文書院、1969年。
- 細谷実、『性別秩序の世界』、マルジュ社、1994年。
- ホフステード、H.、『多文化世界～違いを学び共存への道を探る』、岩井紀子・岩井八郎訳、有斐閣、2003年。
- ミシェル・デイラス監修、『女性と暴力～世界の女たちは告白する』、日仏女性資料センター翻訳グループ訳、未来社、2000年。
- 三島由紀夫、『仮面の告白』、新潮社、1950年。
- ミッチャーリヒ、A.、『父親なき社会』、小見山実訳、新泉社、1988年。
- 水野肇、『女のつよさ 男のよわさ～性差の医学』、東京書籍、1987年。
- 山極寿一、『オトコの進化論～男らしさの起源を求めて』、筑摩書房、2003年。
- 山添正、『父性のたてなおし 母性のみなおし』、ブレーン出版、1997年。
- 山中進編、『女と男の共同論』、成文堂、2003年。
- ラディカ・クマラスワミ、『女性に対する暴力～国連人権委員会特別報告書』、クマラスワミ報告書研究会

- 訳、明石書店、2000年。
- 梁石日、『男の性解放～なぜ男は女を愛せないのか』、情報センター出版局、1992年。
- リン, D.B., 『父親 その役割と子どもの発達』、今泉信人他訳、北大路書房、1994年。
- 渡辺淳一、『男というもの』、中央公論社、1998年。
- 和田秀樹、『甘えの成熟』、光文社、2002年。
- Erikson, E.H., *Psychological Issues, Identity and the life Cycle*, 1959 (小此木啓吾訳編、自我同一性、誠信書房、1973)
- Freud, S., *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, 1905 (懸田克躬他訳、『性欲論三篇』、『フロイト著作集5』、人文書院、1969)
- Fromm, E., *The Anatomy of Human Destructiveness*, 1973 (作田啓一他訳、『破壊』、紀伊国屋書店、1975)
- Storr, A., *Human Aggression*, 1968 (高橋哲郎訳、『人間の攻撃心』、晶文社、1973)
- Winnicott, D.W., *Aggression in Relation to Emotional Development*, collected Papers, 1958 (『情緒発達との関連でみた攻撃性』、北山修監訳『児童分析から精神分析へ』岩崎学術出版社、1990)

On Manliness and Aggression

KAWAZOE Hiroyuki

Even at the present time, our society is men-centric. The men-centric society deals unequally with men and women. And, when men stick to manliness, it is said that domestic violence and sexual harassments and sexual crimes happen to women. It is that men's violence and aggression are causes of those formidable things. But I have doubt about this. In this article, I would like to explore the manliness and aggression.

In conclusion, I would like to clarify the following points: the general idea of manliness cannot be fixed, moreover, violence and aggression are not only men's properties, but they are the properties that human beings all have. This fact is to be disclosed. The real problem is not the being of "men", but it is probably whether we should have it as "human beings" or not.